

日英語の表現形式について

—認知言語学的観点から—

On Japanese and English Expressions: From a Cognitive Perspective

有 吉 淳一郎

日英語の表現形式について

——認知言語学的観点から——

有吉 淳一郎

1. はじめに

我々は外界とのインターアクションを通じ事態を認識し、それを言語化するわけであるが、そのあり様は言語が異なれば異なる。例えば、遠くの方に富士山を見ているとする。このような状況は日本語と英語において、どのように表出されるであろうか。日本語では「向こうに富士山が見える」が自然な表現と考えられるであろう。しかしながら英語では I see Mt. Fuji over there. と表現される。これは日本語に直訳するならば、「私は向こうに富士山を見る」となるであろうが、日本語ではこのような言い方はされない。

このように、たとえ同じ状況であっても、その言語化に際しては日英語間で差異が認められる。本稿では認知言語学の枠組みに基づき、日本語では主観的把握が好まれるのに対し、英語では客観的把握が好まれるといった、両言語間における事態把握の傾向性を概観、その違いによりもたらされる日英語の表現形式の対照性について、具体的事例の考察を通じ明らかにする。日英語の事態把握のあり方に着目し、両者の異なりについて理解することは、必然的に英語学習指導——とりわけ、スピーキングやライティングといった発信型スキルの伸長——にも大きく寄与するものと思われる。

2. 事態把握のあり方と言語化

我々は外界を知覚する際、そのすべてを一様に捉えることはしない。それは必然的に認知能力に依拠する形で捉えられることとなる。このような、我々が物事を知覚する際の認知能力の1つに、図と地の分化の能力がある。物事を知覚において、ある部分は着目され、焦点が当てられることにより前景化される。このような部分は「図」とみなされ、他の部分は相対的に際立ちが低くなり背景化されることにより、「地」とみなされる。¹

図と地の分化については、「ルビンの盃」の例を通じ、理解されるであろう。



図 1

これは、黒い部分と白い部分、そのどちらに焦点が当てられるかによって解釈が変わる多義図形として有名である。黒い部分に焦点が当てられた場合、向かい合った2人の顔が立ち現れ前景化されると同時に、白い部分が背景化される。黒い部分が図、白い部分がその地としてみなされるわけである。これに対し、白い部分に焦点が当てられた場合、今度は盃が立ち現れ前景化されると同時に、黒い部分が背景化される。白い部分が図、黒い部分がその地としてみなされるわけである。これは前者とは逆の認識パターンであり、いわゆる「図地反転」と呼ばれる事象である。知覚刺激は同一であるにもかかわらず、黒い部分と白い部分、そのどちらに焦点が当てられるかに依存して、解釈が異なるわけである。知覚対象の意味が客観的ではなく、認知主体である我々の主観性に基づき規定されることを示すものである。

このような認知的営みは言葉にも密接に関係しており、言語形式に反映されている。以下のペアをご覧ください。

- (1) a. ground
b. land

これらはいずれも「地表」を示す語であり、一見意味に大差はないように思われる。しかしながら、(1a)のgroundは空との対比として、一方(1b)のlandは海との対比として捉えられる語であり、ゆえに、on the ground(地上に)の反意語としてはin the air(空中に)が、そしてby land(陸路で)の反意語としてはby sea(海路で)が対応することとなるのである。²

同様のことは語に限らず、文レベルでも観察される。

- (2) The bike is near the house. (Talmy 2000: 314)

自転車と家の位置関係が描写されている。「自転車が家の近くにある」というわけであるが、ここで仮に(2)の主語と前置詞句の項を入れ替えても、自転車と家、両者の近接関係は論理的には成立するはずである。しかしながら、そのような描写は不自然とみなされる。

- (3) ?The house is near the bike. (Talmy 2000: 314)

(2)に対して、(3)はなぜ不自然に響くのか。一般に、主語には図、前置詞句には地とみなされる事物が生起する。比較的小さくまとまりがあり、可動性の高いものが図として認識され、比較的大きく広がりがあり、可動性の低いものが地として認識されるといった傾向性があり、(3)の不自然さは、主語および前置詞句の項がこのような図と地の特性に反していることに帰されるのである。外界をどのように捉えるのか——認知主体によるその認識のあり方に基づき、言語形式が構築されていることが分かる。³

別の例を見てみる。言語形式に認知主体による外界の捉え方が反映されていることを示す好例と考えられるのではないだろうか。

- (4) a. スマホを見ながら歩く。
b. 歩きながらスマホを見る。

従属節である「～しながら」の部分と主節とが交替している。前掲(2)の場合は、項を入れ替えることによって(3)のように不自然な表現とみなされたわけであるが、この場合はいずれもごく自然な表現とみなされる。ここで見られる交替性に関し、図と地の観点から次のように考えられるであろう。

すなわち、「～しながら～する」という場合、後半の「～する」で表される行為が前景化された部分、つまり図として、前半の「～しながら」で表される行為がこの部分に対して背景化された部分、つまり地として機能する。(4a)では「歩く」ことが前景化され図として、「スマホを見る」ことが背景化されその地となっている。対して(4b)では「スマホを見る」ことが前景化され図として、「歩く」ことが背景化されその地となっているわけである。(4a)と(4b)の表現形式の違いは、客観的に同一である状況に対し、言語主体がそれをどのように捉えているのかといった、事態認識のあり方の異なりに帰されるわけである。

以上より、言語形式は単なる外界のコピーではなく、話者による主体性に基づき創出されることが明らかであろう。「言葉の意味は、外部世界に客観的に存在しているのではなく、われわれの具体的な経験を基盤とする認知のインターフェイスを介して理解され動機づけられている。言語主体として人間は、外部世界との相互作用を通して、具体的な経験を意味づけしている」(山梨 1995: 3)のである。

我々は外界とのインターアクションを通じ、主体的に事態を理解し言語化していく——このことは次例によりさらに明らかであろう。

- (5) a. 日が昇る。
b. 京都が近づいてくる。
c. 1年が年々短くなる。

(5a)は客観的にはおかしい表現である。実際に動いているのは地球の方であり、太陽ではない。よって、事実と反しているわけである。しかしながら我々の感覚としては、そのようにみなされるのであり、その捉えたままが言語化されているわけである。(5b)も同様である。京都は近づいてはこない。移動するのは人の方である。しかしそのように感じられるわけである。(5c)についても同様である。1年の長さは客観的には不変であるが、感じられるままのあり様が言語化されているのである。これらの事例もまた、事態が主体の主観性に基づき言語化されることの左証となるであろう。

以上、我々は言語主体として言葉を発するに際し、まず認知主体として、その身体性を介した外界とのインターアクションを通じ事態を認識し、そのあり様を主体的に言語化していくわけであるが、このような、主体による事態認識のあり方および発話行為について、Ikegami (2015)は次のように述べている。

...before uttering a sentence, i.e., before acting as a locutionary subject, the speaker is presumed to undergo a cognitive process of how to make sense of the situation she is going to encode linguistically. In other words, the speaker has to act as a cognizing or conceptualizing subject before acting as a locutionary subject. The speaker has to decide, for example, which part or parts of the situation she chooses to encode and which part or parts she leaves unencoded and then, from what perspective she is going to encode what she chooses to encode. (Ikegami 2015: 2)

(筆者訳) 話者は文を発する前、すなわち、話す主体として振る舞う前に、自分が言語的にコード化しようとする状況に対する理解のあり方に関し、認知的プロセスを経ると仮定される。換言すれば、話者は話す主体として振る舞う前に、認知主体として振る舞わなければならないのである。話者は例えば、状況のうち、どの部分をコード化しコード化しないのか、またどのような視座からコード化するのかを決めなければならない。

...the speaker (as cognizing subject) is supposed to make her decisions on her own, assessing which possible choice will be most relevant to the communicative intentions she has in mind. This cognitive process is called 'construal' in cognitive linguistics. (Ikegami 2015: 2)

(筆者訳) (認知主体としての) 話者は自身の発話意図にとって、どのような選択肢が最も関連性が高いのかを判断し、自ら決定することになっている。このような認知的プロセスは、認知言語学において「事態把握」と呼ばれる。

言語形式とは、認知主体による外界に対する認識のあり方、すなわち、その身体性を通じ捉えた認知的営みの反映であり、主体的解釈の所産であるわけである。

以上のように、表現形式には話者による主観性が反映されるわけであるが、その度合いは一様ではないことがLangacker(1991)において論じられている。以下の例をご覧ください。

- (6) a. Vanessa is sitting across the table from Veronica.
- b. Vanessa is sitting across the table from me.
- c. Vanessa is sitting across the table. (Langacker 1991: 326-328)

対応する日本語はそれぞれ次のようになるであろう。

- (7) a. ヴァネッサはテーブルを挟んでヴェロニカの向こうに座っている。
- b. ヴァネッサはテーブルを挟んで私の向こうに座っている。
- c. ヴァネッサはテーブルの向こうに座っている。

いずれにおいても、テーブルの一方にヴァネッサが、もう一方に別の人物が座っている様子が描写されている。主観性の度合いについて、どのように異なるのであろうか。

(6a)ではヴァネッサがテーブルを挟んでヴェロニカの向かい側に座っているわけであるが、前置詞句from Veronicaによって明示されているように、ヴェロニカが参照点となっており、話者はヴァネッサを位置づける上で関与していない。話者自身は描写内容に含まれておらず、当該の状況が第三者的視点から描かれており、きわめて客観性の高い——換言すれば主観性の低い——描写となっている。

次に(6b)についてであるが、ここでは(6a)と同様にfrom句が生起しており、(6a)におけるVeronicaのように、話者自身がfrom meによって明示され、参照点となっている。話者が、その中に自分自身が含まれている状況を第三者的視点から捉えており、例えるならば、自分のテーブルの向こう側にヴァネッサが座っている様子を撮った写真を見ながら語っている、そのような場面が想起される。(6a)に比べ、話者自身が当該の状況に直接的に関与しており、主観性はより高くなっているものと考えられる。

最後に(6c)であるが、(6a)のfrom Veronicaおよび(6b)のfrom meのような参照点を示す表現は明示されていない。しかしながら、ヴァネッサを定位する参照点があるはずである。それは何か——それは当該の状況を描写し語っている話者自身なのである。ここでは、同じく話者を参照点とする(6b)のように、話者自身が明示化および客体化されていないが、話者自身が実際にテーブルに座っており、その視点を通じ捉えられる見えがそのままの形で表出されているのである。ゆえに、(6a)から(6c)の中で最も客観性の低い——換言すれば最も主観性の高い——表現として位置づけられることとなる。

以上、(6)の用例は主観性ならびに客観性の観点から見た場合、(6a)は最も客観性が高く、(6c)は最も主観性が高いものとして理解されるわけであるが、事態認識のあり方をめぐっては、言語間において傾向性が認められ、日本語では主観的把握が、英語では客観的把握がその基本となることが知られている。

このような、日英語間に見られる事態認識のあり方の傾向性については、池上(2007)において論じられている以下の日本語文およびその英訳との対比から明らかであろう。

(8) 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。

川端康成の『雪国』の有名な一節である。汽車に乗りトンネルの中を走っている。窓の外は暗闇である。トンネルを出た瞬間、それまでの光景とは対照的に眼前に銀世界がパッと広がる——日本語話者にはこのような情景が思い描かれるのではないだろうか。

さて、この文は英語ではどのように訳出されるであろうか。用いられる語は違えども、その内容にはさして違いはないはず——通例はこのように考えられるであろう。しかしながら、実際には両者には差異があることが指摘されている。

(9) The train came out of the long tunnel into the snow country.

これはSeidenstickerによる英訳版である。原文とどのように異なっているであろうか。

まず気づくのは、日本語では主語が明示されていないのに対し、主語(the train)が明示されている点である。さらに日本語の「長いトンネルを抜ける」の部分については、came out of the long tunnelと、動詞comeが用いられており、話者への方向性が表されている。

仮にこの英文を忠実に和訳すれば、以下のようになるであろうか。

(10) 汽車は長いトンネルから出て雪国へと入ってきた。

さて、英訳版(9)——もしくはその日本語への直訳版(10)——についてであるが、原文と対比してどのように感じられるであろうか。場全体が空高くから俯瞰して眺められているかのようであり、原文(8)において味わわれる状況の刻々と移りゆく様子、目に映る情景の変化などは感じられず、原文で読み込まれる臨場感・体験性はもはや失われてしまっていると言っても過言ではないのではないだろうか。

同じ場面の状況描写であるにもかかわらず、なぜ日本語と英語とでこのように表現形式が異なるのであろうか——その理由は日英語における事態把握の違いに帰されるのである。

池上(2011)は、話者の事態認識のあり方について、主観的把握と客観的把握とに類別し、以下のように特徴づけている。その上で、日本語では主観的把握が好まれるのに対し、英語では客観的把握が好まれるという傾向性を指摘している。

主観的把握：

話者は問題の事態の中に自らの身を置き、その事態の当事者として体験的に事態把握をする——実際には問題の事態の中に身を置いていない場合であっても、話者は自らがその事態に臨場する当事者であるかのように体験的に事態把握をする。

客観的把握：

話者は問題の事態の外にあって、傍観者ないしは観察者として客観的に事態把握をする——話者は(自分の分身をその事態の中に残したまま)自らはその事態から抜け出し、事態の外から、傍観者ないしは観察者として客観的に(自分の分身を含む)事態を把握する。

(池上 2011: 52)

概略、日本語と英語では事態把握における話者の視点の位置が異なっており、日本語では事態把握がその内からなされるのに対し、英語ではその外からなされる——このように理解されるであろう。上掲(8)と(9)の異なり、すなわち、日本語の原文では主語が明示されておらず、臨場感を伴って描写がなされているのに対し、英訳では主語が明示され、全体を俯瞰するように描写がなされているといった表現上の差異は、まさにこのような日英

語の事態認識のあり方の違いによるものとして理解されるのである。

言語形式には話者による事態認識が反映される——このような認知言語学のテーゼに立脚するならば、上掲(8)(9)の事例以外にも、日英語間に認められる表現形式の異なりについて、主体による事態認識のあり方の違いの観点から説明がなされることとなる。次節では具体的事例を通じ、考察を進めていく。

3. 具体例考察

さて、本節では日英語の表現形式に見られる対照性について考察を進めていくが、まずは以下について検討することとする。探していたものが見つかった——このような場合に発せられる表現形式である。

(11) a. あったぞ。

b. I found it!

(本多2005: 157)

日本語で「ある」が用いられる場合に、英語ではfindが用いられる。このように、日本語における存在表現と英語における知覚表現との間には、一定の対応関係が認められるわけであるが、何かが「ある」という場合、それは当該事物の存在について言及されているだけである——ややもすればこのように考えられるかもしれない。しかしながら、本多(2005)では、実はそうではなく、この「ある」は、「知覚された対象としての存在」を表していることが生態心理学の観点から論証されている。

日本語の「ある」もしくは「いる」について、これらが単に事物の存在のみを表すのではなく、その意味成立には認知主体の存在が前提となっていることは次例から明らかであろう。

(12) a. 動物園にいけばパンダがいるよ。

b. You will see a panda if you go to the zoo.

(本多2005: 157)

動物園に行こうが行くまいが、動物園にパンダはいる。つまり、「いる」は純粹に存在の意のみを表しているのではなく、話者・聞き手の存在がその前提となっており、「話し手・聞き手が動物園に行くことによって、話し手・聞き手の知覚可能な範囲にパンダが存在するようになる」(本多 2013: 28)ことを意味しているのである。この点、(11)についても同様に理解される。(11a)では「ある」が用いられているわけであるが、ここでも表面的には明示はされていないものの、対象の存在を認識する主体がその背後に存在していることが前提となっているのである。

以上、(11)(12)について、それぞれ同じ状況下で発せられる表現であるにもかかわらず、日本語では「ある」「いる」の存在表現、英語ではfindやseeといった知覚表現と、異なる表現形式が用いられるわけであるが、その理由は、当該言語話者による事態認識のあり方に帰される——このように考えられることとなる。

すなわち、日本語では主観的把握がなされるため、主体が知覚した事物の見えがそのままの形で言語化されるがゆえに、「ある」「いる」の存在表現が用いられ、自己も明示化されないのである。対して英語では客観的把握がなされるため、主体による対象の知覚という事態全体が客体化され捉えられることとなる。その見えには自己も含まれるわけである。英語の表現形式は、このような事態認識のあり方の反映として理解されるのである。

以下に見られる表現形式上の異なりについても、同様の観点から説明がなされる。

- (13) a. 右に曲がると、郵便局がありますよ。
b. If you turn right, you will find the post office.

日本語(13a)の主文では「ある」が用いられている。日本語では主観的把握がなされるために、話者は当該の状況の中に没入した形となっており、その場から捉えられる見えがそのままの形で言語化されるので、「郵便局がある」と存在表現が用いられ、自己は言語化されない。一方、英語では客観的把握がなされるために、話者は当該の状況の外に置かれた視点を通じ、状況全体を客観的に捉えることとなる。そのために(13b)においては、find(見つける)といった知覚表現が用いられ、自己も言語化されるのである。⁴

次例に見られる対照性についても、同様の観点から捉えられるであろう。池上(2006)は(14a)の英訳に関し、(14b)と(14c)とを比較した場合、(14c)の方が英語話者に圧倒的に好まれるということを指摘している。

- (14) a. 外に出ると、月が明るく輝いていた。
b. When I went out, the moon was shining.
c. When I went out, I saw the moon shining. (池上 2006: 192)

日本語では叙述内容が事態内に置かれた話者の視点に基づくため、その見えに捉えられる「月が輝いていた」という情景が、その見えのままに言語化される。対して英語では、そのような情景を目にしている自己の姿も見えに含まれるために、自己をも含む当該の状況全体が言語化されることとなる。これがすなわち、(14c)の形式なのである。(14b)は非文とまでは言えないわけであるが、これはきわめて日本語的なスタンスから書かれた英文であると言えよう。(14b)に感じられる英文としての不自然さは、日本語の流儀に則り作文されていることに帰されるであろう。⁵

日本語では主観的把握がなされるのに対し、英語では客観的把握がなされる——このような日英語における事態認識のあり方の違いに基づく、Hinds(1986)の指摘する、日本語では自動詞構文が好まれ、英語では他動詞構文が好まれるといった言語事実も同様に捉えられる。

- (15) a. あ、こぼれちゃった。
b. Oh, I spilled it.

- c. ?Oh, it spilled.
(16) a. あ、割れちゃったわ。
b. Oh no, I broke it.
c. ?Oh, it broke.

(Hinds 1986: 53)

飲み物をカップに注ごうとしたものの、うまくいかずに、カップの外に出してしまった。このような状況では日本語では自動詞を用い、(15a)のように発せられる。これがごく自然な発話であろう。しかしながらこのような場合、英語では他動詞を用い、(15b)のように発せられるのである。日本語(15a)に対応する自動詞文(15c)は不自然に響く。以上は(16)についても同様である。日本語では、皿やカップなどが「割れた」と、自動詞を用いて表現するのに対し、英語では他動詞構文が用いられる。そして英語では自動詞構文は不自然とみなされる。このように、日本語では自動詞構文が、英語では他動詞構文が用いられるという対照性が見られるわけであるが、この点についても日英語話者による事態把握の違いの観点から説明がなされる。以下のとおりである。

日本語では事態の場内に話者の視点がある。そこで(15)を例にすると、その見えには飲み物をこぼした人物は含まれず、飲み物のみが捉えられることとなる。このような事態認識のあり方の反映として、主体については言及されることなく、「こぼれた」と自動詞が用いられ、あたかも飲み物がひとりでにこぼれてしまったかのような表現形式が取られることとなるのである。

このような日本語に対し、英語では事態の場外に視点があるため、事態がその外側から鳥瞰的に眺められ、その見えにはこぼれた飲み物と同様に、飲み物がこぼれるという事態を生じさせた人物も含まれる。このような事態認識のあり方の反映として、人物を主語に据え、飲み物を目的語に据えた他動詞構文が用いられることとなるわけである。

以上見てきたように、日本語では主観的把握がなされ、英語では客観的把握がなされるわけであるが、このような事態認識のあり方の違いは、日英語における感情を表す表現形式の対照性をも説明することとなる。

日本語では、感情を表す表現形式において人称制限があることが知られている。

- (17) a. (私は)うれしい。
b. *あなたはうれしい。
c. *彼女はうれしい。

いわゆる感情形容詞文である。1人称の主語を用いることは可能であるが、2人称もしくは3人称の主語については容認されない。⁶

ところが、英語では主語の人称に関係なく、be happyという形式が一律に用いられる。

- (18) a. I am happy.
b. You are happy.

c. She is happy.

これはなぜであろうか——日英語話者による事態認識のあり方に基づき説明がなされる。

日本語では主観的把握がなされるのに対し、英語では客観的把握がなされる。そこで日本語においては、事態はその中に身を置く話者により体験的に語られるスタンスが取られるわけであるが、うれしいといったような感情は、当該人物の内部に発現するものであり、このような心の内面は本人のみが知覚・体験できるものである。ゆえに(17a)に対して(17b, c)は容認されない。他者の感情については、その内側から捉えることは不可能であるため、結果、主語が2人称・3人称の場合、「～のようだ」「～みたいだ」といった表現を介し、外側から推し量るしかないのである。

- (19) a. あなたはうれしそうだ。
b. 彼女はうれしそうだ。

このような日本語に対し、英語では(18)に例示されているように、1人称主語と2人称・3人称主語との間に対照性はなく、いずれも同様に用いられるわけであるが、この点について、話者による事態把握の観点から次のように説明される。すなわち、英語においては、事態は当該の事態の外に身を置く話者により客観的に語られるスタンスが取られる。これは、話者が自己と他者を区別することなく、すなわち1人称と2人称・3人称を非対照的に捉えるスタンスであり、このような認識のあり方の反映として、(18a-c)に見られるように、主語の人称の違いに関係なくbe happyといった同一の形式が用いられるのである。換言すれば、日本語では自己は揺るぎない、他者と峻別される存在であるのに対し、英語では自己は他者と同列に扱われる存在として位置づけられると言えよう。⁷

日英語における話者の事態把握の違いに基づき、次例に見る文法事象についても説明がなされる。いわゆる時制の一致である。

- (20) a. 彼は本を読んでいると言った。
b. He said that he was reading a book.
c. He said that he is reading a book.

(20a)「彼は本を読んでいると言った」を英訳する際は、(20b)のように主節の動詞をsaidと過去形にし、そして原則、これに呼応して従属節内の動詞もwasと過去形にする必要がある。これは「時制の一致」として学校文法で習いはするものの、考えてみれば不思議な話である。日本語では「読んでいると言った」と、非過去形と過去形が用いられていることから、「読んでいる」の部分をis readingとし、(20c)のように英訳されてもよさそうなものである。なぜ日本語では「彼は本を読んでいると言った」となり、その英訳では(20b)にあるように、「読んでいる」の部分がwas readingと過去形になるのであろうか——次のように説明される。

日本語では話者の視点が事態の場内に置かれ、この視点を通じて状況が描写される。そこで(20a)についてであるが、ここでの「読んでいる」という出来事は、発話時から客観的に見た場合には明らかに、ある過去の時点での事柄なのであるが、話者の視点が当該の状況の中へと没入し、その中から語られるために非過去形が用いられる——このように考えられるであろう。対して英語では、話者の視点は事態の場外に置かれる。そこで英語では、「言った」というある過去の行為と、この過去のときに生じていた「読んでいる」という行為は、両方とも客観的には同じ「過去」という単一の時制における出来事として捉えられるのである。このような事態認識の反映として、英語では(20b)に見られるように、主節の動詞saidと同様、従属節内もwas readingと、過去形が用いられるのである。

英語では話者の視点が事態の場外に置かれ、この定点から事態描写が客観的になされるのに対し、日本語では話者の視点は事態の場内に置かれ、たとえ客観的に過去の出来事であっても、話者の視点は当該の出来事の場へと没入し、個々の現場性に基づき状況が描写される——英語とは対照的に、日本語では個々の出来事の場内に話者の視点が移動することが意味されるわけであるが、日本語におけるこのような、いわば話者の視点の可動性、とても呼ぶべき特徴について、森田(1998: 136)は以下の例示を通じ論じている。

父は酒も煙草もたしなまない。外で宴会があっても八時ごろには帰ってきたし、夜は書齋で書見をするか書き物をしていた。朝は食事の前十分、かならず書齋に鍵を掛け、ことりとも音がしなかった。キリスト教徒であった父は、お祈りをしていたが、どんな内容の祈りであったか、知るよしもない。
(永井道雄『おやじ・永井柳太郎』)

冒頭から3文目の「書齋に鍵を掛け、」の部分までは、客観的な視点からの描写がなされている。しかしながら、この直後の部分についてはどうであろうか。もしも客観的な視点からの描写を続けるのであれば、「ことりとも音をさせなかった」と他動詞を用いて表現されるはずである。しかしながら「ことりとも音がしなかった」と、自動詞「する」が用いられている。これは、語り手が当該の状況の中に身を置き、その場で感じられる音の様子について、認識の原点として叙述しているためであると解されるであろう。語り手の視点が、文の途中で客観的スタンスから主観的スタンスへと移行しているわけであるが、特に注意しない限り、そのような変化には気づかないであろう。これはきわめて日本語的な、自然な叙述のあり方であり、日本語における事態認識を特徴づける主観性および視点の可動性についての左証となるであろう。

4. おわりに

言語形式には主体による事態認識のあり方が反映される——このような認知言語学のテーゼのもと、日英語における基本的な事態把握のモードである主観的把握および客観的把握について概観、日本語・英語の表現形式に見られる対照性について、その例示を通じ考察した。日本語と英語は、異なる事態把握のモードにより特徴づけられるわけであるが、

このような対照性に基づいた研究は、言語にとどまらず、言語と文化の相同性(homology)にも寄与するものと考えられる。この点については稿を改めた。

注

1. 図と地の特性・区分、および多義図形等については、山梨(1995)を参照されたい。
2. 野村(2014: 29-30)に基づく。
3. 「机の上の本」と「本の下之机」を比較すると、前者の方が自然に響く。しかしながら、もしも本が何冊も積み重ねられている状況であれば、後者はさほど不自然ではなくなるであろう。本が積み重ねられることにより、その無界性が増し、地として認識されやすくなるためであると考えられる(池上 2007: 211-212)。
4. そもそも存在と知覚の概念がなぜ結びつくのか、についてであるが、この点については、本多(2005: 159)にて論じられている。大変興味深い、根源的問題である。
5. 授業などを通じ大学生に(14a)を英訳するように言うと、(14b)のように回答するケースが少なくない。このような傾向性は日本語話者に広く見受けられるものと思われるが、(14)の類例として、以下を挙げることができるであろう。

- i a. ドアを開けると、見知らぬ女性が立っていた。
b. When I opened the door, a strange woman was standing by the window.
c. When I opened the door, I saw a strange woman standing by the window.
(早瀬 2009: 85)

早瀬(2009)では、これらの例を通じ、日本語母語話者による英作文の傾向性について指摘、論じられている。(ia)の英訳において、(ib)と(ic)、そのどちらかが日本語母語話者に見られがちな作例であるかは、言うまでもないであろう。

6. 例文(17a)について、1人称主語「私は」は明示されないのが無標であるが、(17b, c)と対比させるため、「(私は)」とした。
7. 日本語における1人称主語の2・3人称主語に対する対照性は、「うれしい」のような感情表現の他、欲求や意向などの表現についても同様に観察される。感情をはじめとするこれらの表現はいずれも、話者の心的あり様を表しており、それを直接的に体験できるのは、話者本人のみである。この意味において、「主観的把握が最も自然に起こる状況」であり、日本語ではそれが、話者の非明示化——ゼロ化——といった自然な形で言語化されることとなるのである(池上 2007: 303)。この点については、森田(1998)も参照のこと。

参考文献

- 早瀬尚子(2009)「懸垂分詞構文を動機づける「内」の視点」『「内」と「外」の言語学』坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明(編), 55-97, 開拓社, 東京。
- Hinds, John (1986) *Situation vs. Person Focus*, くろしお出版, 東京。
- 本多啓(2005)『アフォーダンスの認知意味論』東京大学出版会, 東京。

- 本多啓(2013)『知覚と行為の認知言語学』開拓社, 東京.
- 池上嘉彦(2006)『英語の感覚・日本語の感覚』日本放送出版協会, 東京.
- 池上嘉彦(2007)『日本語と日本語論』筑摩書房, 東京.
- 池上嘉彦(2011)「日本語と主観性・主体性」『主観性と主体性』(ひつじ意味論講座 第5巻)澤田治美(編), 49-67, ひつじ書房, 東京.
- Ikegami, Yoshihiko (2015) “‘Subjective Construal’ and ‘Objective Construal’,” 『認知言語学研究』 第1巻, 1-21, 日本認知言語学会.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*, Mouton de Gruyter, Berlin and New York.
- 森田良行(1998)『日本人の発想、日本語の発想』中央公論社, 東京.
- 野村益寛(2014)『ファンダメンタル認知言語学』ひつじ書房, 東京.
- Talmy, Leonald (2000) *Toward a Cognitive Semantics, Vol. 1: Concept Structuring Systems*, The MIT Press, Cambridge, MA.
- 山梨正明(1995)『認知文法論』ひつじ書房, 東京.